



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                                                                                                              |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北海道におけるツーリズムの課題と可能性：先住民族の歴史・文化・現在に関するアクセス手段としてのツーリズムの観点から                                                                                                                    |
| Author(s)        | 山村，高淑                                                                                                                                                                        |
| Relation         | Symposium on Tourism and Landscape in the North. Tuesday, 1 November, 2011. Hokkaido University Conference Hall.<br>国際シンポジウム「北方のツーリズムと景観」．2011年11月1日（火）．北海道大学学術交流会館 小講堂．札幌市． |
| Issue Date       | 2011-11-01                                                                                                                                                                   |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/47369">https://hdl.handle.net/2115/47369</a>                                                                                            |
| Type             | conference presentation                                                                                                                                                      |
| File Information | abstract_yamamura.pdf, 要旨集掲載アブストラクト                                                                                                                                          |



## 北海道におけるツーリズムの課題と可能性 先住民族の歴史・文化・現在に関するアクセス手段としてのツーリズムの観点から

山村 高淑（北海道大学観光学高等研究センター 准教授）

北海道におけるツーリズムを考えるうえで、その大前提として忘れてはならないのは、これまでのツーリズム開発における先住民族の歴史・文化・現在に対する無知と無関心である。明治の同化政策以降、2008 年になってやっと「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆参両院で採択されたことからわかるように、我が国の政府並びに国民の多くは先住民族問題に関して無関心で続けた。

こうした無関心は、旅行商品やガイドブックにおける北海道の表象のされ方からも良くわかる。それらの多くが、あたかも人の手が入っていないかのような「手付かずの大自然」、あるいは明治期以降の開拓の歴史のみを強調した「フロンティア精神」といった、極めて偏ったイメージで北海道を形容し、宣伝し続けている。

しかしながら、北海道は先史時代より人が連綿と住み続けてきた土地であり、数千年にわたる文化の蓄積がある。明治期以降の開拓の歴史は、あくまでも北海道の歴史のごく一部であるに過ぎない。いうまでもなく現在の北海道文化の基層には、和人移住以前の文化、特にアイヌ文化が存在しており、こうした先住民族文化への理解・敬意無しに、ことさら開拓文化やロマンを語る観光プロモーションやプログラムは歴史を曲解して伝えてしまう危険性がある。

ICOMOS が International Cultural Tourism Charter (1999) で定義しているように、ツーリズムとは経済活動であるとともに、「最も重要な文化交流の手段 (the foremost vehicles for cultural exchange)」である。つまりツーリズムとは、旅行者だけでなく、地域社会内外のあらゆる人々に、文化遺産の価値・重要性を「現場での実体験」、あるいは「知識」、そして「感性面での親しみ・楽しみ」として、アクセス可能にするための手段なのである。

こうした点を踏まえれば、今後、北海道におけるツーリズムが早急に検討しなければならない課題のひとつは、「先住民族が管理面や提供する資源面で直接関与する観光活動」、すなわち先住民族観光 (Indigenous Tourism) の確立である。つまり先のアクセスの観点から言えば、先住民族の積極的関与の下、先住民族の歴史・文化・現在に対する情報を、正確に、親しみが持てる形で、あらゆる人々に対してアクセス可能にする仕組みの構築である。

そしてその際、重要な論点となるのが、①誰が（先住民族の積極的関与と、先住民族・非先住民族との協働関係の構築、人材育成）、②どのように（ガイドシステム、ICT の活用など）、③誰に対して（旅行者、市民、先住民族）、情報を発信していくか、という点である。特に情報化の進展が、先住民族自身による自由な情報発信をこれまでになく可能としている点は、今後の情報発信のあり方を考えていくうえで極めて重要なポイントになると考えられる。

以上のような観点を背景として、報告者らは、先住民族による主体的なインタープリテーションのあり方、ならびに先住民族が自律的且つ継続的に運営できる遺産情報の受発信システムのあり方を検討することを目的として、道内複数個所でヘリテイジトレイルを設定し実証実験を行っている。今回は、こうした取り組みを通して把握された、先住民族観光の確立に向けた課題と可能性について、具体的に報告したい。北海道のツーリズムを考えていくうえでの、論点のより一層の明確化に資することができれば幸甚である。